

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019 ~ 2023

課題番号：19K00817

研究課題名(和文) 外国語表現選択支援システムの構築

研究課題名(英文) Development of a System to Support the Selection of Foreign Language Expressions

研究代表者

磯部 美穂 (Isobe, Miho)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：60579853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本人ドイツ語学習者の作文コーパスおよびその添削文コーパスを作成し、日本人ドイツ語学習者がドイツ語作文の際に選択する語彙や表現の傾向を抽出した。またそれらをドイツ語母語話者と日本人ドイツ語教師がどのように添削をおこなうか、添削作業上における共通点と相違点を明らかにした。本研究成果は、今後、テキスト作成の指南書やドイツ語表現集として、まとめていく予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語で作文をおこなう際の添削や作文指導における問題点について、外国語教育、とりわけ英語以外の外国語やその学習現場において、あまり議論されてこなかった。本研究では、添削という作業が、学習者にどのような影響を与えるか、また、指導者や添削者がどのような姿勢で、添削という作業に向き合うべきか、を問題意識として掲げ、言語を質的・量的な側面から分析することで、その実態を明らかにすることができた。潜在的にしか意識されてこなかった、外国語でテキストを書くことの難しさ、その指導や添削の困難さを研究を通して顕在化させたことは、学術的かつ社会的な意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：A corpus of Japanese learners of German and a corpus of corrected texts were created to identify trends in the vocabulary and expressions that Japanese learners of German select when writing German. We also investigated how native speakers of German and Japanese teachers of German correct these texts and the similarities and differences in the correction process. The results of this research will be compiled in the future as a guide to text writing and a collection of German expressions.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語作文 ドイツ語 表現の選択 添削作業

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

外国語の学習者が、その学習言語でテキストを作成する際には、高度な運用能力が求められる。すでに高等教育機関で研究活動に従事しているような研究者にとっても、外国語での「作文」には、母語話者による添削作業は欠かせない作業行程のひとつである。しかしながら、この添削という作業は、添削者にとっても困難な作業である。テキストとは、書き手である作成者の思考を言語化したものであり、そのために選び出された表現は、作成者の個性を反映するものである。添削者は、その作成者の個性を尊重しながら、テキストによる発話行為の遂行を目的とし、執筆言語の文体的不自然性を排除していく。その際、添削者は、<どの程度、元のテキストの個性を残すべきか>を問いながら、添削者自身の考える論理的かつ明瞭な文章を構築していくことになる。その結果、完成したテキストは、ときに全く新しい、異なるテキストになってしまうこともある。

こうした添削作業は、外国語教育の現場における重要な学習指導課程であるにもかかわらず、四技能の中でも「書く」能力の指導方法は、十分に検討、実施されているとはいえない。とりわけ、大学入学後から学習を開始する第二外国語に関しては、作文能力が短期間で高い水準にまで到達することは難しく、また、十分な指導を受けることも難しいのが現状である。

2. 研究の目的

こうした背景を基に、本研究では、第二外国語のひとつであるドイツ語に関して、作文学習を支援できるような方法を考案することを目的として、調査を開始した。まず、日本人ドイツ語学習者がどのような表現を好んで選択し、どのようなテキストを作成するか、質的・量的な分析を通して明らかにすることから着手する。その上で、ドイツ語母語話者や日本人ドイツ語教員が添削者として、どのような作業をおこなっているか、添削者間の共通点と相違点を明らかにすることを続いたの目的とした。

3. 研究の方法

三種類の言語資料を作成し、それぞれを量的・質的に分析し、比較する。まず、一つ目の言語資料は、日本人ドイツ語学習者の作成したテキストをデータベース化したもので、それらを品詞分析し、日本人学習者が好んで使用する語彙や表現の傾向を明らかにした。二つ目は、学習者コーパスを基に、ドイツ語母語話者 3 名と日本人ドイツ語教員 1 名に添削作業をおこなってもらい、作成されたテキストをデータベース化し、添削者コーパスを作成した。学習者コーパスと同様に、添削者コーパスを量的・質的に分析し、作業結果を比較した。最後に、ドイツ語圏で公開されている言語資料の中から、客観的・主観的テキストを収集し、データベースを作成した。新聞記事など事実を客観的に記述する客観テキストとエッセイやコラムなどの作者の主観を中心に記述される主観テキストとの言語表現の特徴を抽出し、学習者コーパスの分析結果と比較し、表現選択の傾向の位置付けをおこなった。

4. 研究成果

ドイツ語学習歴 3 年程度の日本人ドイツ語学習者 12 名が作成したドイツ語テキストと 3 名のドイツ語母語話者 (GNS: German Native Speaker) と 1 名の日本人ドイツ語教員 (JGLT: Japanese German Language Teacher) が添削したテキストを語数や文の数、品詞の頻度を比較し、その類似度を算出した (コサイン類似度: 1 = 完全に似ている)。

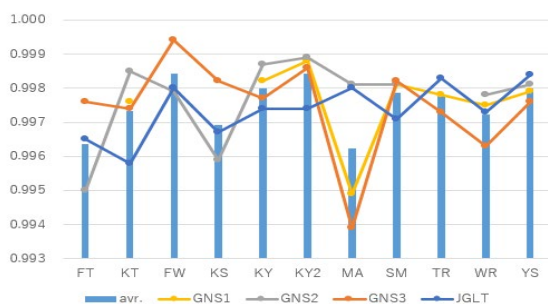


図1 学習者テキストと添削テキストの類似性

数値的にみると、学習者のテキストによっては変更の程度が異なる添削者がいる一方、どのテキストにも同程度の変更を加えている添削者もいることがわかる。質的に添削テキストを分析すると、同様に各添削者の個性が反映されている例がみられたが、共通しておこなわれていた作業として、文頭の語順変換が挙げられる。実際に、学習者のテキストをみると、接続する機能をもつ語（接続詞 and, aber, den, 指示詞付き前置詞 dazu, damit など）を文頭に置く傾向が顕著であることが確認できた。

添削テキストとの比較結果を踏まえて、ドイツ語母語話者が作成したテキストとの比較をおこなった。ドイツ語圏で公表されているニュース記事などの客観テキストとコラムやエッセイなどの主観テキストの二つのテキストジャンルについて、文や語、品詞分析をおこなった。以下に結果を示す。

表1 テキストジャンル別 文と語の総数

	文	語
客観テキスト	223	2817
主観テキスト	111	1414
学習者テキスト	396	5103
計	730	9334

表2 テキストジャンル別 頻出する品詞の語数（頻度（%））*冠詞・名詞・動詞除く

	前置詞	副詞	形容詞	並列接続詞	人称代名詞
客観テキスト	308 (10.9)	205 (7.2)	126 (4.5)	88 (3.1)	67 (2.3)
主観テキスト	131 (9.4)	157 (11.2)	83 (5.9)	61 (4.3)	45 (3.2)
学習者テキスト	508 (10)	190 (2.1)	255 (5)	217 (4.3)	158 (3.1)
計	947	552	464	366	270

学習者テキストでは、ドイツ語母語話者テキストと比較して、副詞の頻度が低く、それに対して、並列接続詞が多用されていることがわかる。他方、並列接続詞の頻度は、主観テキストの頻度と同程度である結果も興味深い。というのも主観テキストでは、コラムやエッセイなど話し言葉に近い表現が使用される傾向がある。

続いて、文頭に置かれる語を算出すると図2のような結果となった。

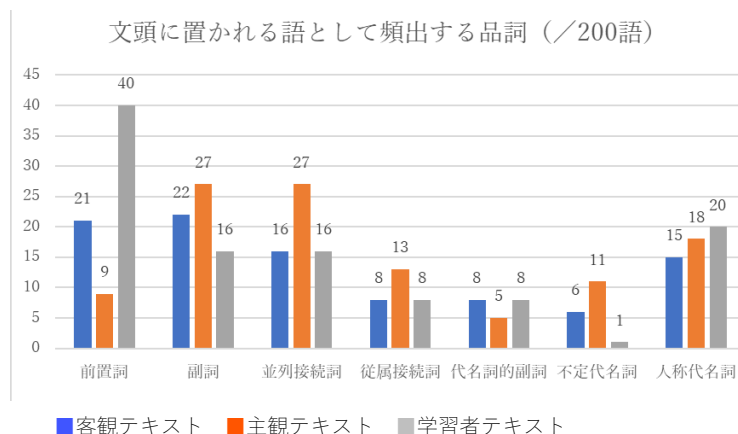


図2 文頭に置かれる語として頻出する品詞（／200語）

学習者テキストでは、前置詞句が文頭に置かれる傾向があることが確認できる。特に指示詞 da-を伴う語である。続いて、人称代名詞、接続詞、意味的に文の接続を明確にできる語が選択されているといえる。

外国語の「書く」能力は、主観的なテキスト（日記やエッセイ）から段階的に客観的なテキスト（事実伝達や学術論文）へと発展していくものである。学習言語の自然な文体に近接するよう、学習水準に応じて、段階的にどのような学習方法や指導が必要とされるか、引き続き検討が必要である。また、新たな科学技術、メディアの出現は、新たな学習手段をもたらし、学習者の主的学習を支援するものとなり得る。このことを踏まえ、次の課題に取り組んでいく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Miho Isobe, Manuel Philipp Kraus, Tomoe Entani	4. 巻 8
2. 論文標題 Similarities and Differences in Correction Operations - Quantitative and Qualitative Analyses based on a Learner Corpus.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Shinshu Study of Humanities	6. 最初と最後の頁 81-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Manuel Philipp Kraus	4. 巻 59
2. 論文標題 Effektive Vermittlung der Artikelsemantik im Fremdsprachenunterricht Deutsch als Fremdsprache für Japanische Deutschlerner (JDL) im ersten Semester - Eine Fehleranalyse im virtuellen Bildungsraum mittels der Lern-Applikation Kahoot.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Cultural Review	6. 最初と最後の頁 43-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Miho Isobe
2. 発表標題 Effektive Anwendung von Übersetzungs-Tools im Sprachunterricht Deutsch als Fremdsprache für japanische DeutschlernerInnen
3. 学会等名 X . Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 磯部美穂, 円谷友英
2. 発表標題 文の作成過程における前域文成分の選択傾向について
3. 学会等名 日本独文学会北陸支部研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miho Isobe, Tomoe Entani, Manuel Philipp Kraus
2. 発表標題 A Learner-Corpus based Study on Correction Methodology
3. 学会等名 56th Linguistics Colloquium (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Manuel Philipp Kraus
2. 発表標題 Wie digitalisierte und virtuelle Bildungsraume die grammatischen Fertigkeiten japanischer Deutschlerner (JDL) im DaF-Unterricht steuern.
3. 学会等名 Virtuelles Forschungskolloquium DaF in Japan, (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomoe Entani
2. 発表標題 Comparison Between Original Texts and Their Revisions to Improve Foreign Language Writing
3. 学会等名 8th International Symposium on Integrated Uncertainty in Knowledge Modelling and Decision Making (IUMK2020) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 カンミンギョン他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 同学社	5. 総ページ数 258
3. 書名 ドイツ語学への視点・ドイツ語学からの視座	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	円谷 友英 (Entani Tomoe) (10346702)	兵庫県立大学・情報科学研究科・教授 (24506)	
研究分担者	クラウス マヌエル・フィリップ (Kraus Manuel Philipp) (20788319)	早稲田大学・商学大学院・准教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関